つて其の國を倒さねばならぬ。故に今支那の偶像教徒を征伐し……從來罪を犯す道具であつた軍隊を以て、贖罪の器としやうと思ふ。吾等は支那に攻め入つて神聖戰爭に從事し、偶像教の寺院を燒き拂つて、回教の殿堂を建てねばならぬ。かくて我等は罪を亡ぼし神明の免しを得るであらう。聖典は善行によりて過去の罪惡の消滅を教へて居る」と、如何なる辭柄を工夫しても、かく巧みに士心を糾合し得る手段はなからう。則ち彼が遺憾なくこの宗教を利用し、また充分にその效果を擧げ得た所以である。しかし同宗徒の征伐の理由としてはかゝる言葉は用ゐ得るものではない。「何れの國を問はず、暴政、壓制、罪惡が行はるれば、之を討つて、その害毒を除くのは君主の義務である」と云ふ位のことで、波斯征伐の時にもかく諭したことが彼の法制に見えて居る。印度を征伐する時に、また露西亞の東卽ち欽察を征伐する時に、如何に此の宗教が彼に與へた便宜が多かつたか、また居常人心を收攬するのに、如何に之を利用する必要があつたかは、容易に想像し得る處であらう。

一二　土耳古族の盛衰

帖木兒が土耳其族に屬することは前に述べて置いた。由來此の民族は屢々大飛躍を試みて、世界の史上に大波瀾を描いたものである。古くは歐洲を蹂躙したフン種族の如きも、大きく見て此の一族の中に數へられやう。名高い突厥といふのはトルコなる言葉を漢字で書いた丈けのことである。東羅馬帝國を倒して今日迄コンスタンチノープルに據つて居るものは彼等の最近の代表者である。かく數へて見れば此の民族の過去は甚だ長いもので、そうして武勇の點に於て實に光輝ある歷史を有するものである。中でも帖木兒の如き人を出したのは、彼等の誇とし得るこ